



- 学校教育目標
- ・進んで学ぶ生徒 (知)
 - ・心豊かな生徒 (徳)
 - ・たくましい生徒 (体)

「命」について・「電池が切れるまで」 2/1 全校朝会より

今日は、「命」の話しをさせてください。本人は、もちろん生きてたくて、周りの人も生かしたくて、本人も周りの方も努力を惜しまず命を支え、生きた生徒の話です。

私は、この時期になると必ず思い出さずには、いられないことがあります。それは、卒業証書授与式のある出来事です。その時から私は、校長でいる間は、卒業生一人一人の顔を見て、全員に卒業証書を手渡すと強く心に決めたのです。【途中略】

この話は、私が院内学級のある中学校に校長として赴任し、一人の女子生徒に卒業証書を渡すまでの事です。この生徒は、2年生の新人戦で剣道個人戦、県大会で3位に入る程、元気な

子です。しかし、その直後、自分の不調に気づき、病院を受診しました。すると、白血病だとわかります。その後は、病院に入院、治療とともに院内学級に入学、勉強と治療を続けました。

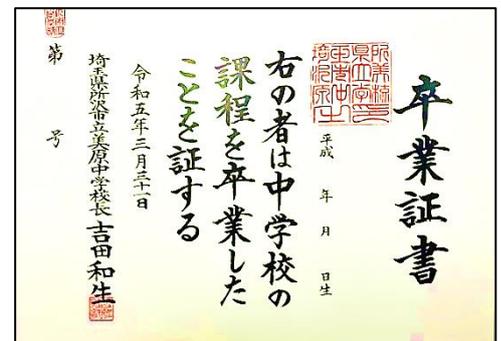
院内学級とは、病棟の中の一つの部屋を借りている小さな学級です。車いすに座った子や点滴をしている子、パジャマの子、ストレッチャーにのっている子、洋服に着替えている子など様々です。年齢層は、小学生から高校生位までいます。病院では、生と死を隣り合わせているような、重い病気の子どもたちも治療を受けています。

悲しいことですが、昨日まで院内学級で一緒に勉強していた子がとつぜん学級に、来なくなる
ことがあります。そのようなところです。

しかし、その子は、持ち前の頑張りやで治療を終え退院しました。当たり前の日常が戻り、3年生秋の合唱コンクールでは、皆と一緒にミュージックで歌い、楽しそうにしていたのが今でも目に焼き付いています。

しかし、残念ながらその後、再び体調を崩し、治療が始まります。更に専門的な治療をするため、岩槻にある小児病院（現在は、さいたま新都心へ移動）に転院しました。入院は、3年生後半でしたので本人もご家族も、そして私も、あきらめず受験に挑みます。私は、何度も高校へ足を運び、高校側も協力してくださることになりました。

岩槻の小児病院にあるアイソレーター（無菌室）の中で、受験を行い、見事合格します。私は、たとえ入学が、数か月遅れても、生徒の次の道を確保させ



たかったのです。それが「生きる」の意欲にも、つながると信じました。

私は、本人やご家族に「卒業式の日、病院でも何処でもモーニング姿で、私がかがいがいい、卒業証書を手渡します。」とお伝えしてありました。ご家族も快諾いただいていた。

しかし、しばらくして希望の灯が揺らぎます。卒業式当日の朝、お父さんからお電話で、「今日は、容態が良くないので、せつかくですが後日をお願いします。」とご連絡いただきました。そして、数日が過ぎ、次の連絡は、お父様より「今朝娘が、亡くなりました。今までありがとうございます。」というご連絡でした。皆に厳しい現実が突き付けられました。数日後に彼女がお宅に戻ったと聞き、彼女に会うため親御さんに弔問の了解を得て、3年生の職員と自宅に伺いました。

私は、当然モーニングの礼装、職員もお祝いの服装で自宅に伺い、目を閉じて安らかにしている彼女に卒業証書を読み上げ、授与しました。今回お伝えする私の話しは、以上です。

最後に、私が伝えたいことが書いてある本「電池が切れるまで」の「詩」に出会いました。宮越 由貴奈 ちゃんとう小学校4年生の女の子が、理科の実験で乾電池で豆電球が光ることに感動したときに書いた詩です。それを朗読して終わりにします。この子は、神経芽細胞腫と言う病気で、この詩を書いた4か月後に亡くなります。



「命」

宮越 由貴奈 小四

命はとても大切な
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池は、いつか切れる
命もいつかはなくなる
電池は、すぐとりかえられるけど
命は、そう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたってやっとな
神様から与えられるものだ
命がないと人間は、生きられない
でも
「命なんかいらない。」
と言って
命を無駄にする人もいる
まだたくさん命が使えるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は、休むことなく働いているのに
だから、命が疲れたと言っまで
せいっぱい生きよう

ゆきなちゃんは、まだ十一歳でした。ゆきなちゃんがこの詩を書いたころ、テレビのニュースは、毎日のように子供たちの自殺やいじめが伝えられていました。でも、病院に入院している、ゆきなちゃんの周りには、苦い薬を飲み痛い治療を我慢して頑張っている子ばかりです。「生きたくても生きられない子がいるのに、なんで自殺したり人を殺したりするのかなあ？なんで友達をいじめの？」ゆきなちゃんは、それをどのようにとらえていたのでしょうか。

今日の話は、以上です。少しでも命の大切さが伝わってほしいと願っています。

参考文献：角川つばさ文庫 「電池が切れるまで」 宮本雅史 作 みやこしゆきな 絵